

比島沖海空戦敗残記

岩手県 山崎博司

昭和十九年十月中旬、豪州より北上するマッカーサー軍の「レイテ」島上陸で、捷一号作戦が発動された。

去る六月のア号作戦で甚大なる被害を受けた六〇一航空隊は、松山基地においては戦艦艦爆、宮崎基地では艦攻が、次期作戦での捲土重来を期して日夜猛訓練を続けていた。しかし、まだ訓練は不十分で、やっと発艦の見込みのある搭乗員と、選抜された整備員とを乗せ、十月二十三日一路豊後水道を南下したのであった。

軽巡「大淀」、その後方に「瑞鶴」、「瑞鳳」、「千代田」、「千歳」の四航空母艦、その周りには「伊勢」、「日向」の二航空戦艦、軽巡「五十鈴」、「多摩」、駆逐艦「若月」、「秋月」、「初月」、「霜月」そして「桑」、「楨」、「桐」、「杉」以上十七隻の帝国海軍最後の機動艦隊が輪形陣

での出陣であった。

大空はいやが上にも快晴、波は穏やかで、何処で戦争があるかのように平穩の限りであった。私には初めての海戦参加であり、心を跳らせて必勝を期しての出陣でもあつて、周囲の艦を頼もしく思い、海軍軍人として入団以来のこのような感激をしたことは無かつた。

四空母には零戦四十機、爆装零戦および彗星艦爆二十二機、天山艦攻八機、往時なら「瑞鶴」一艦でも収容が出来る機数でもあつた。南大東島を過ぎたころより無線封止を解除され、偽電により敵に我が機動艦隊の位置を探知され、「レイテ」島を指す「大和」、「武蔵」以下の栗田艦隊の囹艦隊として敵「ハルゼー」機動艦隊を北方に誘致するのが作戦の目的であつたらしい。

いよいよ二十五日は会敵予想で、前日夕刻までそれぞれの分担に応じて飛行機の整備を完了して万全を期した。そして明日の戦闘に備えて牛乳と「パン」が配られたのであつた。どうせ明日の戦闘では生死の程は

わからない。その配食になった牛乳と「パン」を平らげて仕舞ったのである。慌ただしい出撃での積載であり牛乳が多分痛んでいたものと思われ、食事直後、今まで腹痛の経験のない私であったが、猛烈な腹痛に襲われ、暫く飛行甲板の「ポケット」で収まるのを待った。だがなかなか収まるどころか痛みが増すばかりであった。遂に我慢が出来なくなって病室に転がり込んだのである。

軍医の診断の結果疑似赤痢とのことで、折角の初陣が戦列として参戦のできない悲運に泣いたのであった。往年の連合艦隊といえは優秀な現役兵ばかりであったが、「瑞鶴」に乗艦して驚いたことには補充兵の多いことだった。これでこの戦いにはたして勝てるのか疑問に思った。私は血気盛りの現役兵、しかも張り切り一杯の一等下士官ではあったが、一夜にして吐く、下るで体力が消耗して仕舞った感じがした。

翌日敵の第一波は、旗艦である「瑞鶴」を襲った。送信機室に被弾し使用不能となり、僚艦経由で栗田艦隊への連絡に二式空三号電信機を代替するため架設

中、至近弾により上田上曹は唇を擦傷し、池田整長は腰部、阿部一整は頭部にそれぞれ直撃を受け、壮烈な戦死をしたとのことだった。

これらのことを「若月」に救助された時に聞かされたすら祈ったのであった。第二波、第三波と来襲し最後の止めを刺されたのは午後に入ってからだった。近接魚雷で病室に海水が奔流し、一瞬病室は阿鼻叫喚の場と化した。退避命令が出たが、重傷者は逃げることは出来ない。軽傷者であっても足の立てない患者は必ずで戦友にすがりつく。あたかも地獄の様相であったのである。

私は数日前に乗艦したばかりの艦であるため、艦内の勝手は全然見当がつかない。艦内の電灯も消えて闇の中、数名の戦友と共に「ラツタル」を上ええと昇った。光明を見つけて漸く道い出したところは左舷の高角砲塔であり、艦はすでに停止し二十度程傾斜しており、まだ上空には敵機が、我が艦の沈没するのを確認するように飛んでいた。「総員集合」で艦橋まで四

ッ這いで昇らなければならなかった。「軍艦旗降ろし方」続く万歳の三唱で「総員退艦」の令があった。

私は遭難は初体験で、三種軍装を脱ぎ禪一つに水泳帯を延ばし飛び込んだ。すでに何百名かの兵で一杯だった。大艦の沈む時吸い込まれるので艦より遠ざかった。水泳帯は鎌に襲われる予防策である。「ハワイ」以来数々の殊勲艦「瑞鶴」も一四時一四分永遠に比島沖、北緯一九度五七分、東経一二六度三四分、艦首を上にして艦尾より沈んで行った。

海上の兵は期せずして万感胸に迫り、「海行かば」を皆泣きながら大合唱となった。浮かぶ兵の頭を狙って敵機が銃撃をしてくる。その都度海にもぐるなどして難を逃れたのであった。日没までの数時間ただ漂流したのである。四方見渡す限りの大海原、生へ執着のみであり救助されるまでの時間の永かったこと。

「千歳」「千代田」「瑞鳳」と沈み、最後の帝国海軍機動艦隊も壊滅したのである。夕刻となって「初月」、「若月」の駆逐艦が救助に来た。私は「若月」に救助されたが、救助されて艦の上で「助かった」と安堵を

するのか、救助後甲板の上で息を引きたる兵が以外に多かった。これらの兵は、まだ戦闘中なので海に投げ込む水葬にしたのであった。

その夜「初月」は十数隻の敵艦艇の集中砲火により、推定五百人の救助された「瑞鶴」の乗組員を乗せたまま艦長以下全員が戦死した。私はこの度の戦闘で幾度となく死線を乗り越えたが、想うに生死は紙一重であると痛感をしたのである。若き戦友の多くを失ったこの海空戦、ひたすらその御冥福を御祈りするばかりである。